

## アジア太平洋文化への招待

# 東チベットからラサにいたる間の祭りと文化 — 吐蕃古道沿いアムドの六月会

服部 等作 広島市立大学教授



写真1 舞踏紋彩陶盆の輪踊りの表現  
(青海省大通県上孫家寨遺跡出土)

私の旅のテーマは、世界の屋根と例えられるヒマラヤを中心にしてその周辺各地にある工芸とデザイン文化の研究である。

インドを起点に始まった20数年来の旅は、ここ数年特に変貌の著しい中国に的を絞り、青海省東部の西寧から西藏自治区の中心ラサのウ・ツァン地方を結ぶ古代の吐蕃古道沿いの調査\*を進めている。訪れる東チベットのアムド(青海省東部と甘肅省の一部)及びカム(雲南、四川、青海省南部の一部)地方は、大自然と多様な民族文化が今も豊かに残り、過酷な旅のなかで心がなごむ。その一方で、本年7月に北京-ラサを直結する青蔵鉄道の完成が象徴する国家的な西部大開発事業により、地域や溪谷毎に孤立した辺境地域が発展するとともに、各地の文化的変容が進んでいるのを目にする。

本稿ではこうした旅を通じアムド地方の特色ある伝統の「六月会」(別名ルポ祭)の紹介を通じてアムドに残る伝統文化と変貌の一部を伝えたい。



### 「六月会」祭りと芸能

ヒマラヤの東北縁、中国の西部側に位置する現在の青海省の別名アムドと呼ぶ地方で、新石器時代に栄えた甘肅-仰韶文化の彩陶土器が出土している(写真1)。先住民族の人々が手をつないだ輪踊りの様子から収穫や豊饒を祈る舞踏と祭祀とされ、神に奉ずる祭りが重要であった事が伝わってくる。

この古代の伝統は、今も吐蕃古道沿いをはじめヒマラヤ北縁の各地に見いだせる。ここでは青海省黄南チベット(蔵)族自治州の同仁県を訪ねた話題をとり上げる。

人口約8万人(2000年)の7割がチベット人の同仁県は、紀元8世紀頃以降より漢族の大唐帝国とチベット族の青蔵大高原の王国-吐蕃との紛争の歴史を有する地域である。同仁県は、4000m級高峰が連なる中、標高4766mのシアチェン夏瑠峰から雪どけ水

が黄河の中流域支流の隆務河となって県を中心とする同仁の町(隆務鎮)に沿って流れる。

今もチベット人の信仰を支える伝統的な民族文化は、戦乱や文化大革命といった歴史の中で人々が守り抜き、その信仰の証しとして、青海省有数の隆務寺や仏教以前の古い信仰に基づいたボン教徒の村が今も残る。また信仰の中心にある仏教を荘厳する造形芸術は、隆務河沿いの各村で金属工芸、仏画、泥塑彫刻などの工房が数世紀にわたり今も製作活動を続け、さらに伝統的な祭りや芸能表現は、ソワル、ゴマルなど隆務河沿いの村毎の「六月会」で見ることができ、アムドの人々の信仰と文化の中心地・熱貢として国際的にも有名である。



### 「六月会」とは

「六月会」は、秋の収穫期前に災難から身を守り、邪気を払い、村の安定と五穀豊穡を祈り、神へ奉納する伝統祭事である。各村々が約1.5km毎の至近距離にもかかわらず祭りの特徴が異なり、また他県で残る「六月会」と比べ盛大である。この祭りの文化は、チベットで仏教が栄える以前の古い呪術的信仰の名残であり、ラツェ(焼香用の炉)を中心とする供犠台と焼香供養、村人の法師(ハワ)の神がかり、無名の神霊への信仰など農耕、狩猟を基盤にした古い共同社会の形態が残る。



図：中国全図と黄南チベット族自治州・同仁県地図

\*文部科学省・科学研究費補助金による西藏自治区-青海省をむすぶ藏族の工芸美術と芸能の文化、に関する日本と中国の共同による国際学術調査である。



## ソワル村の「六月会」の流れ

モンゴル語で軍隊の意味を村の名につけたソワル村(苏合目)は、青海省の西寧市と同仁県を結ぶ工事中の高速道路を通り、同仁の町から約20分位で着く。

ソワル村の「六月会」の祭事は、次の内容で進む。「六月会」の祭りの開始は、農曆で6月16日、すなわち夏至頃の満月の日より一斉に始まり、通常2~5日程行われる。「六月会」開始の早朝に「産土神(生まれた土地を守護する神)の御輿」を廟から担ぎ出し、薄い絹製の哈達(獻呈用のスカーフ)を客人や活仏、廟を荘厳する産土神、守護神の絵にかけ、松、柏の枝などで飾り付ける。次に村の世話人が御輿を先導し、祭日の正装した村人と共に各戸を回り、災難や邪気から護身を行い、村の平安と五穀豊穡を祈る。祭りの広場は、高い土塁や家の外壁に囲まれているため、直前の路地でやっと村の廟の矢立、焼香台が見え、その奥まった位置がわかる。チベット仏教と古い神霊信仰の両方からの影響を有する廟全体が、すでに早朝から村人が杜松をもやした焼香の煙で覆われている。朝から各戸で供物を作り、バター製の花飾りをほどこし、無名の神霊信仰や産土神を祀る村の廟に運ぶ。広場には、多数の村人達が集まる中、廟の中の読経からその日の行事が始まる。村の神廟と広場の矢立、焼香台を囲み、ドラの開始の合図のもと変化に富む踊りが始まる(写真2)。

- ① 壮年から幼児までチベットの民族衣装をつけ、頭にタオルをかける男性の準備的な踊りで始まる。
- ② 男性の戦いの踊りは廟内の読経に囲まれ、神を歓迎する法師(ハワ)の動き(写真3中央)、神が遷移したハワと片面太鼓をたたきながら踊る若者たちが順繰りにまわる。そして焼香台からたちのぼる煙、縁起物の宝珠の絵を描いた羊皮太鼓をたたき、踊り手は徐々に気分が高揚する(写真3)。

③ 男性が神舞の一種「哈達を捧げる舞」を踊る。先導の若者は、チベット族の英雄ゲサル王を描いた札を持ち、他の者は武器を象徴する短い棒を持ち、円陣を作り踊る。次に村の未婚女性が踊りに参加し別の輪を作る。長髪の女性は、清代の夏冠風の赤絹を垂らす帽子を被る。背中には銀製の円盤飾りを付ける。また踊りを伝承するため幼女が隊列の後ろに参加する(写真4)。

④ 供犠に供されるバター製の羊は最近まで生きた羊を使ったが、残酷を理由に中止に至った。他の村では屠殺後に心臓や身を供犠に供している(写真5)。

⑤ 青年が長い木の棒を脚にくくる高足で産土神を描くタンカ(仏画)を背中に掛け、羊皮太鼓をたたき竹馬のように跳躍の踊りをする。合間に風刺の寸劇、女性の「哈達を捧げる舞」が入る。

⑥ 男性が自由形式の踊りで参加する。⑥の先頭は、活仏の由来の仏画、護法神のタンカや軍旗をもつ男性が「神にみせる奉納の踊り」で先導する。

⑦ 「インドから来た修業者」とされる踊りは、ほおと背中に「鉄針刺し」をした男達の踊りで苦行を体験する。タンカをかかげる男性が先導し、踊り手は興奮の渦となっている。

⑧ 手を天にかざし、次に大量のヨーグルトを地面に献じる「天と地を結ぶ踊り」がある(p.4 写真6)。この後に②、③ならびに⑥が繰り返される。ハワは、広場の人々の前で新たなハワを引きだそうとする。

⑨ 青年男子が頭部を刀で傷つけ、その鮮血を大地に捧げて敵に向い祈る儀式である(p.4 写真7)。

⑩ 男性と女性が総出場し、「感謝の大きな踊り」。供物をすべて神廟の高い焼香炉で燃やし、風の馬の護符絵、天に酒を捧げ、地に酒とヨーグルトを撒き、神に送る。祭りは、色々な打楽器が加わり、男も女も、老いも若きも、大きな輪舞の渦となってカオスなる宇宙を作る(p.4 写真8)。



写真2 六月会開始の行進



写真3 神に歓迎のカタをかかげるハワ、羊皮太鼓をたたき踊り手



写真4 神に歓迎のカタをかかげる女性たち



写真5 供犠のバター製羊、神にささげる



写真6 ヨーグルトの布施、鉄針刺しの正装の踊り



写真8 祭りの大きな輪舞、カオスの小宇宙



写真7 鮮血の布施

① ハワが神廟にこもる、男性が総出で列を開けて占うハワを待ち受ける。ハワがトランス状態になり座したまま空中浮揚する。踊り手は神の出現を待ちわび、直後にハワが廟から突進し広場に立つ。夕闇がせまる空の下でハワは、広場の人々の前で神と祈禱の文章を記した紙を束ねた長い棒を一生懸命に念じ、神の啓示を引きだし、会場の外の結界に向け突進する。

② ネズの木を燃やし、その焼香の煙が天に届くよう、一連の儀式が終わる。

っぱいの森の中など様々である。男・女の役割に非常に大きな差があり、男性は、犠牲獣となる羊の供物儀式、焼香供養、ハワによる神がかり、無名の霊媒一神霊信仰のイベントを仕切る。一方女性は、未婚者と伝統継承の役割を担う未成年女子の参加が許され、既婚女性は見学に限られる点に対し、男性が村長や村の有力者、ハワから子どもに至る地位と年齢まで参加可能と、男尊女卑が残っている。

親子代々受け継がれてきた豪華な銀製装飾品も飾らないなど、簡素化が顕著である。さらに自動車の普及と道路網のインフラ整備により、村や寺院の奥深くにまで車が進入でき、景観が激変した光景を今やチベット各地でみることができる。

以上の点から、日本で戦後の経済発展にともなう伝統文化の喪失と俗化の歩みが繰り返されたように、チベットの貴重な文化が衰退する可能性を懸念するのは私だけだろうか。本年6月に日本で成立した「文化遺産国際協力法」によって、文化財保護にかかわる国際的協力が国として可能となった今日、我々研究チームが続けてきた伝統文化の記録と保存をめざす研究の価値が問われる時代に入ったのである。

(写真2～8は筆者撮影)



### ソワル村の「六月会」の要素

以上ソワル村「六月会」を例にあげて、<sup>ラシゼ</sup>神舞と呼ぶ踊りを中心に流れを追った。六月会の特徴は、村毎に神舞、<sup>ラシゼ</sup>龍舞ならびに<sup>ロンク</sup>軍舞と踊りが異なり、また高足、打鬼の斧、魔除け面を用いて輪をつくり長龍のように踊るなど、踊り手、道具、楽器、身体の装飾も特徴が違う。歌垣もなく会場も奥まった広場、四方に開けた屋外、緑い



### チベット伝統文化の喪失への危惧

調査した吐蕃古道沿い各地には多彩な文化が多く残る。一方で経済発展による社会変化と伝統文化の変貌がすすんでいるのも事実である。伝統の変化例は、自治州政府主催の民族運動会や<sup>トバン</sup>同仁県のある村の「六月会」の中で新しい創作踊りに見ることができる。また、参加意識の低下は、祭り当日にテレビ番組にくぎ付けになっている若者、民族衣装の素材変化や、

### はっとりとうさく

1947年大阪生まれ。東京芸術大学卒業。(株)日立製作所デザイン研究所を経て、現在広島市立大学芸術学部教授、兼図書館館長。ヒマラヤをとりまく文化圏表象芸術、王朝家具の研究をすすめている。著書は、「天空の世界遺産都市-ラサ・ポタラ宮をめぐるヒマラヤ文化圏」、アジア遊学42号・2002年(勉誠出版)など。